

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

懐かしさ

堀口 貴宏

「三十周年を迎えるにあたり、佑啓に寄稿してほしい」理事長のご子息、吉佑さんから話を頂いた。私のこれまでの社会人生活はほぼその年月に重なっています。

ふる里学舎でお世話になったのは大学を卒業して八年ほど。市原市今富の地に施設が開所して、三年目の入職でした。

時が経つのは早いもので、その当時、まだ小学生ぐらいだった吉佑さんとも、いつからか、法人においても業界においても、一緒に仕事をするようになっていました。人の縁とは不思議なものです。

あのとき、声をかけて頂いたことから今が繋がるなんて、その当時は考える由もありませんでした。

いまでも、ふと、ひとりになると、あの頃の日々の様子が、まざまざと蘇ってまいります。

大学卒業間近に迫った平成七年二月、三股先生の案内で施設見学したのが、ふる里学舎との出会いでした。一月に阪神大震災、三月に地下鉄サリン事件、世の中が騒がしかったことを覚えています。当時は人生で何をしたらいいか分からなかったし、大学に通っ

てもやりたいことが見つからず、両親が蓄えたお金をひたすら浪費しているだけでした。就職活動もせず、フリーターでも何とかなると思っていました。

そんなバカ息子に見兼ねた父が、「おまえ、将来どうするんだ。何も決まってるんじゃないなら、ここでも顔をだしてこい」と怒られ、渋々行った場所が、その当時の厚労省の職員や県内の施設長さん方が意見交換する宴席の場でありました。何もしゃべらず、分不相応な座敷の末席に座っていた学生に「よかつたら一度見学に来てみないか」と声をかけていただいたのが里見先生でした。

車から降り、門のところまで歩いては車に戻り、車内でタバコをくゆらせる。なにせ、福祉施設に行くのはほぼ初めて。知的障害という、まるつきり自分の知らない世界に不安を抱いたことは確かでした。

普通の人の感覚とはそのようなものかもしれません。未知なるものへの好奇心と不安は密接に繋がっているのでしょうか。

三回ほど行ったり来たりして、腹をくくって見学後、「次回は親と

一緒に来てほしい」と言われ、一週間後、理事長室のソファーに父子で座っていました。

「給料はいらない。便所掃除だけさせてくれ。こいつに働くことの意味を教えてやってほしい」父の言葉に、「えっ！」心の声が漏れるくらいびっくりしましたが、黙っているしかありません。無給で便所掃除とは。多少は迷いましたが（厚顔無恥ですみません）、お世話になることを決めました。

今振り返ると、自分が人生で下したもっとも正しい判断だったと思います。



平成7年職員旅行～猿ヶ京温泉
（上段左から2番目が堀口氏）

入職し、辞令には農芸科という文字。障害の重い人たちの担当でありました。これから、なんの知識も経験もない青年が苦労するのは、想像に難くないでしょう。

初めて障害者と接して、コミュニケーション手段としての言葉がない人、あってもその言葉自体に意味を持たないときもあり、とても困惑したことを覚えています。知的障害という障害の特性上、自分たちの意見を訴えづらいという

面があり、文字などでも伝えることができない人も多く、様々な点でハンデがありました。

それをわかってやれるのが職員だろう、と言われるかもしれませんが。しかしちよつとした仕草、表情や行動から彼らの気持ちを汲み取るようにしていました。難しい面があったのも事実です。障害の重い人ほど、この現実には深刻なものでありました。

それでも、月日が解決してくれた面もあり、いつしか慕ってくれる方も増え、柔和な表情を浮かべてくれるだけで、うれしかった気がします。利用者も私のことがわかってきて、次第に落ち着いた表情を見せてくれました。

ある程度の時間を一緒に過ごすことで、人との距離は縮まります。結局は、人同士の付き合いだということに、改めて気付かされました。このことは、今の私の仕事にも通じています。

それから、ミカンの管理や、シイタケの収穫に追われる日々。自分は支援員なのか、ミカンやシイタケの世話係りなのかわからないう。手にした感覚で、小袋にシイタケ三百グラムを仕分けられる頃には、爪の先端がシイタケの肉で真っ黒になっていました。

環境整備もよくやりました。竹やぶや湿地帯など、荒れ地に飛び込み、開拓に勤しみました。もちろん、お酒も付き物です。あの厳しく、忙しい日々の中でも、職員が明るく、生き生きと働いていたことを思い起こします。それでも本当に楽しい日々でした。

今とは違い、事業が始まったばかりのころです。私なんかが窺い

知ることのできない困難、苦労が、沢山あったことでしょう。

それでもとにかく、情熱をもち、努力し、行動していくなかで、道を選び、ひたすら歩み続ける幹部の姿に引つけられ、なんとか後を追いかけることができたように思います。

失敗したら、二度と同じ失敗をしないように、どうやったらいいのか、その場で考える。そして考えたら、酒でも飲んで、騒いで忘れる。次の日にはすっぱり忘れる。また、新しいことにチャレンジする。

こうした一連の光景に、佑啓会らしさ、が凝縮されている気がします。



一泊研修～秩父長瀨（左から4番目）

私はいま、保育園の園長として働いています。

待機児童問題が騒がれ、さらなる保育園建設に奔走していたころ、遅々として進まない建設用地の取得、二転三転したうえ、新たな土地に案内されたとき、反対側の風景に突如、目を奪われました。ふる里学舎の景色が、急によりがえってきたのです。

「周囲に家がなく大丈夫か」多くの人に心配されましたが、

無我夢中で地権者宅を回り、自分の直感を信じ、開園まで漕ぎつけることができました。

園名は「さとの保育園」。

隣地はミカン畑。今では、多くの方から、入園を希望される保育園になりました。



「さとの保育園」

今の私があるのも、里見理事長はじめ職員の皆さまのご指導とご支援があったからだ、心から深く感謝とお礼を申し上げます。

いつまでも、人間の情感あふれる職場でいてほしいと願っております。

創立三十周年、誠におめでとうございます。

社会福祉法人長須賀保育園

法人本部長

社会福祉法人佑啓会

監事



としては指導をして頂いている職員

何回かの行事に参加するようになった頃、渡部家族会元会長（故人）より役員への就任要請をいただき、監査役でお世話になることになりました。

その中にあつても利用者中心の考えの基、いろんな計画を立てられ、それらを実行されている職員の皆様に心より感謝を申し上げ、引き続きのお力添えをお願い申し上げる次第です。

きっかけは、もう分からなくな
ってしまった。一年目の終り頃、職
員室と一緒に仕事をしている職員に
声をかけることができた。二年目に
はプライベートでお酒を飲みなが
らくだらない話ができる仲間がで
きた。三年目、自分から遊びたい
相手を探すようになった。笑
って仕事ができるようになった。

全力を尽くすのは気持ちがいい。だからこそ、最近よく考えることがある。私が正しいと思つて全力を尽くしていることは、誰かにとつては不利益になることもある。客観的に見て正しいことが、必ずしも正解とは限らない。そして、全力を尽くすということとは、誰かの正義とぶつかるということ。きつと真剣に向き合つてゐる人ほど、衝突が増えていくのだらう。その衝突を避けようと、自分を押し殺す人も少なくない。主張を恐れる人を不思議に思つていた

そんな想いを込めながら佑啓一二三号をお届けします。